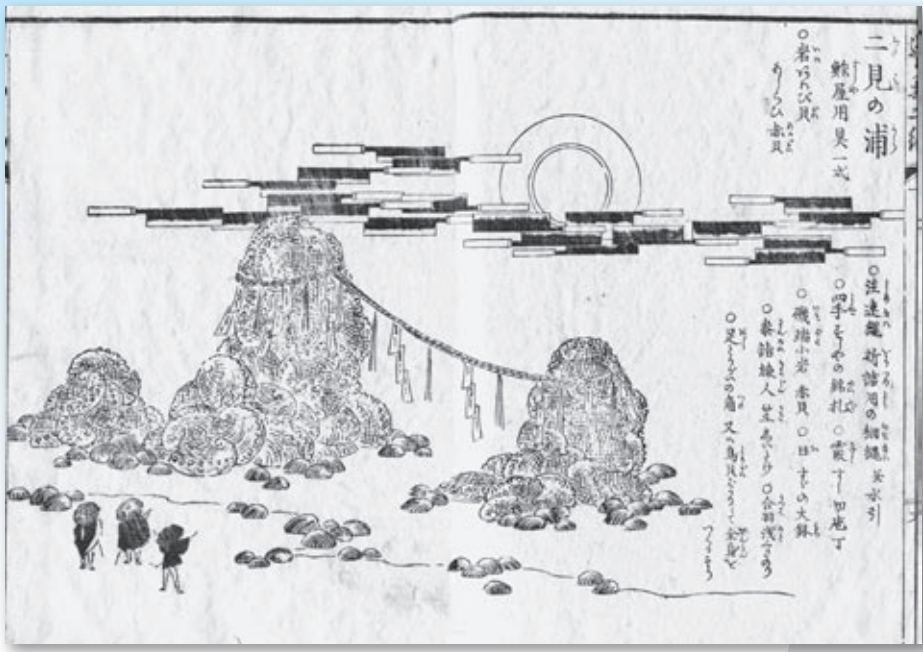


おおさか
KEY
ワード
第4回

造り物は夏祭りの季節



〔四季 造物趣向種〕より 寿司屋の用具で作る〈二見の浦〉

夏だ！祭だ！とにぎやかな声が聞こえはじめた。7月は大阪の祭り月だ。勝鬨院の愛染まつり〔6月30日～7月2日〕を皮切りに、7月25日の天神祭の陸渡御、船渡御を経て、住吉大社の夏祭〔7月30日～8月1日〕までの間、市内のどこかで夏祭が開かれている。仕事帰りや、近所を散歩していると、お囃子が聞こえてきて、「きょうが祭りの日やった」と、はっと気がつくことも多くなるだろう。

大阪の祭といえば、華やかなお囃子のみならず、祭礼を独特の雰囲気^{はやし}で彩ったのが“造り物”である。夏祭や正遷宮のとき、日常道具や商品を集め、なにか別の物を作って飾り付けるもので、本町の坐摩神社境内の陶器神社で、せともの祭に展示する瀬戸物人形がよく知られている。また平成17年、大阪天満宮では、天満天神御伽衆によって、大正15年(1926)から途絶えていた“造り物”が復活した。《蛭の藤棚》と《乾物の狸々舞》があり、《蛭の藤棚》は字の通り蛭の貝殻を藤の花に見たて、棚に吊り下げたものである。日常見なれたモノが遊び心で別のモノに変容する。祭礼という“ハレ”の場にふさわしいデコレーションである。

大阪人は“造り物”が好きだった。天保8年(1837)心齋橋筋の書店が、“造り物”の作品集『四季 造物趣向種』(乾坤二冊)を刊行している。趣味人・文人たちが「他に負けるものか」とひねり出した“造り物”のアイデアを、大坂の絵師・松川半山が絵画化した

本である。ただし、どうすれば実現可能か、首をひねる奇想天外なものもある。

そのなかから何点が復元したのが、天神橋筋六丁目にある大阪くらしの今昔館(住まいのミュージアム)で、例年、夏の常設展の時期に、幕末の街並みを復元した展示室に登場する。一番大きいのが、表紙掲載の嫁入道具で出来た《獅子》である。性格の良さそうな顔つきに、私は「ペロちゃん、お手!」なんて呼びかけたくなるのだが、ほかに、漆椀でできた《鞍馬之僧正坊》、木魚を中心に仏具から成る《布袋》、化粧具で出来た《鶏》(眉はけで出来たヒヨコが可愛い)がある。昨年はボランティアさんたちが、箒による《蟻螂》とシャモジの《如来尊像》の、新作二点を制作している。

『四季 造物趣向種』の絵には、荒物一式による《虎》がある。幕末にも“虎キチ”がいたと喜ぶ熱烈な阪神ファンには申しわけないが、全身ふのりで作る虎で、なんだか頼りない。また、寿司屋の用具による《二見の浦》もギョッとさせられる。アワビの貝殻を積んだ夫婦岩、笠が椎茸、合羽が浅草のり、足がトリ貝の角である参詣人がかわいらしいが、錫製大皿の朝日にかかる霞が、「すし切り包丁」の大群なのが、なにやらこわい。

現代には現代の“造り物”を考案してはいかがでしょう。通天閣に新幹線が貼りついた《鯉のたきのぼり》といった壮大なものをひとつ…。